2020-T-02

【提言】

アートを活かした
人材育成と都市価値向上へ。
～大阪・関西の未来を文化の力でつくる～

2021 年（令和 3 年）3 月

一般社団法人 関西経済同友会
文化の力委員会

【目　次】

第１章　提言の視座 ･････････････････････････････ 1

第２章　社会実験から得られたこと ･････････････････････････････ 5

第３章　提言 ･････････････････････････････ 7

① 大阪市内の子どもたちを対象に、美術館におけるアートを活かした
アクティブ・ラーニングの機会の継続的な提供を。
② 一方向的な鑑賞機会の提供にとどまらず、
市民自身が美術館の担い手として能動的に参加できる機会の提供を。
③ 大阪・関西の都市価値を高めるため、夜間開館、イベント開催、
周辺地域との連携など、市民に開かれた新しい美術館のあり方の実現を。

■参考資料

① コーポレート・アート・コレクション ･････････････････････････････ 9
「なにわの企業が集めた絵画の物語」展（第１回～第３回）
実施概要と成果
開催概要／来場者数／来場者の評価／対話型鑑賞教育／
夜間来場者比率（17 時以降）／地域連携活動／報道件数

② 有識者の意見（文化の力委員会、芸術・文化委員会　講演要旨）･･････ 13
地域経済・教育とアート／対話型鑑賞教育／
関西企業のフィランソロピー精神／歴史に学ぶ－「大大阪」と美術

③ 関西経済同友会の活動経緯 ･････････････････････････････ 16
関西 2019・20・21 委員会提言／第 56 回関西財界セミナー宣言

2018～2020 年度 文化の力委員会 活動実績 ･････････････････････････････ 18
2020 年度　文化の力委員会　名簿 ･････････････････････････････ 22

第１章　提言の視座

日本と世界は今、大きな変革の時を迎えている。

AI、IoT、ビッグデータの活用による数値分析や効率化の加速等に伴い、企業間・都市間・国家間の競争が激化している。少子高齢化・人口減少、持続可能性と成長の両立など、解決すべき社会課題は山積しており、未来のあり方が容易に見通せない「VUCA の時代」であると言われている。こうしたなか、新型コロナウイルス感染症による世界規模のパンデミックが、日本と世界に、社会・経済・生活全般の変革の加速を迫っている。我々には熾烈な競争を勝ち抜き、VUCA の時代を越えて未来への変革をリードする新しい価値を生み出すための思考と感性が求められている。

芸術文化は古来より人々の心に寄り添い、生きる活力を与え、心の発育（情操教育）と癒し（心の平穏と豊かな人生への欲求）を支えてきた重要な要素である。

近年、経済・産業、教育、医療・福祉、ダイバーシティ、まちづくり、外交など様々な分野において、芸術文化のもたらす効果・インパクトが世界各国で注目されている。従来、芸術文化は保護・支援される対象とされがちであったが、今、「文化の力」は、イノベーションを促進し社会を牽引する存在へと転換しつつある。

今こそ、「文化の力」の真価が問われている。これまでのリアル文化における発信力に加え、これからのヴァーチャル世界における発信力も問われる時代の到来に備えることが必要である。

一方で、大阪・関西は、日本文化・経済の中心としての長い歴史を有し、有形無形の豊かな文化資源が集積している。大阪大学総合学術博物館・大学院文学研究科教授の橋爪節也氏は、このように述べている。

「大阪は、京都、江戸（東京）と並ぶ『三都』で、独自の個性あるここしかない都市だ。私は『素数』のような都市であると感じる。経済的蓄積以外にも、大阪にしかない歴史的蓄積と文化資源がある。我々自身がそれを学び発信していくことが不可欠である。」（関西経済同友会文化の力委員会講演会 2020 年 9 月）

第 56 回関西財界セミナー宣言（2018 年）は、「われわれは、創造力の源泉である文化の可能性を信じ、関西の歴史と伝統により生まれた文化の力を活用することによって、より豊かな感性と発想力に富む人材の育成に取り組む。」と述べている。文化の力を活用することによって、大阪・関西の都市価値を高め、大阪・関西に暮らす人々の生活の質（QOL）を向上させ、VUCA の時代を越えて未来を切り拓く次世代人材の育成に取り組むことが重要である。

未来を担う次世代の人材として、我々は、子どもたちの育成の重要性に着目した。

中央教育審議会の答申（2016 年）では、「予測困難な時代に、一人一人が未来の創り手となる」として、このように述べている。

「子供たち一人一人が、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要である。」（中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」 2016 年）

上記の問題意識にもとづき 2017 年に改訂され、小学校では 2020 年度から実施されている学習指導要領改訂版は、「主体的・対話的で深い学びの実現（「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善）」をひとつの柱としている。

アクティブ・ラーニングとは「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習方法の総称」であり、「学習者が能動的に学習することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の獲得が促進されることをねらい」としている（河村茂雄「アクティブラーナーを育てる自律教育カウンセリング」図書文化社 2019 年）。

そもそも「教育 education」の原義をたどると、ラテン語の ducere（導き出す）、あるいは e（外へ）＋doctus（導く）の合成語と言われている。つまり、「学習者に潜在する思いや能力、可能性を引き出す」ことが教育においては重要なポイントであり、そういうねらいが言葉に埋め込まれている（石川一喜・小貫仁編「教育ファシリテーターになろう！」弘文堂 2015 年）。知識・経験を一方的に「押し込む」形だけが教育の本質ではなく、子どもたちの資質・能力・可能性を「引き出す」形の教育が、変化する状況に自律的に立ち向かっていく力（「生きる力」）を育てるために、今あらためて重視されている。

子どもたちの「生きる力」を育てるうえで文化の力はどう役立つか、兵庫県立美術館館長（金沢 21 世紀美術館元館長）の蓑豊氏は、このように述べている。

「日本ではなかなか美術館で子どもの姿を見ないが、大英博物館など、海外では子どもたちが美術館に寝袋を持ち込んで泊まれるイベントもある。金沢 21 世紀美術館では、開館の際、子どもたちにぜひ本物のアートと接して感性を育んでもらいたいと考え、市内の全小中学生約 4 万人を美術館に招待するプロジェクトを実施した。以後 12 年間、小学 4 年生を継続的に招待している。2016 年には、石川県が全国学力テストで初めて一位を獲得した。いい音楽、いい絵、いい文章に触れることはとても大切で、芸術の答えは一つではない。受験勉強だけではない感性教育が子どもたちを奮い立たせた成果だと考える。」
（関西経済同友会　芸術・文化委員会講演会 2017 年 8 月 8 日）

子どもたちの「生きる力」を育てるために、関西の強みである豊かな文化の力をどう活かすか、そのひとつの手法として、我々は「対話型鑑賞」に着目した。

美術作品の鑑賞とは、「正解がない問いに主体的に取り組み、自分なりに答えを導き出すという行為」とされる（岡崎大輔「なぜ、世界のエリートはどんなに忙しくても美術館に行くのか？」SB クリエイティブ 2018 年）。

美術作品を題材とした「対話型鑑賞」について、京都芸術大学芸術学部教授・アート・コミュニケーション研究センター所長（当時）の福のり子氏は、このように述べている。

「知識や情報よりも、鑑賞者同士のコミュニケーションを大切にして美術作品を鑑賞する対話型鑑賞。『みる・考える・話す・聴く』という 4 つの能力を普段よりも意識的に使い、作品の表面ではなく、その奥にある意味を考える。AI は、表面上の意味や正しい答えは早く的確に出すことはできる。しかし、物事の背後にある世界、奥深い意味を読み解くことはできない。対話型鑑賞で行うことは、AI には備わっていない人間にしかできない行為なのである。対話型鑑賞によって培われるのは、①知的探究心 ②目的意識をもった観察力 ③正解のない問いに取り組む力 ④創造的解釈 ⑤体系的・論理的思考 ⑥言語能力 ⑦他者を理解したいという気持ちの芽生え→コミュニケーションの基礎 ⑧多様性の受容→他者と生きていくための基礎 ⑨自己対話力など様々である。これらは『自分で課題をみつけ、自ら考え、主体的に判断・行動し、問題を解決する力、自らを律しつつ他人と協働する力』という学習指導要領で掲げられている『生きる力』にほかならない。アート(art)の語源はアルス(ars)、つまり『生きる術』である。対話型鑑賞で得られるのは、今後どのような世界がやってきても、その中で生き抜いていくことができる、サバイバル力なのだ。」（関西経済同友会 文化の力委員会講演会 2018 年 8 月 8 日）

我々経済界は、地域社会を構成する重要な一員として、具体的な行動を通じて社会貢献に取り組む責任を担っている。文化の力を活用し、次世代人材を育成するために、まず我々自身が率先して自ら動くべきであると考えた。

「これまでに残された偉大な文化・芸術を継承し、さらに新しいものや人を生み出していこうとする意思と、自主自律の行動力が今まさに問われている。国や自治体からの資金を受身で待つだけではなく、2019･20･21 年のメガイベントを契機に、できる限り多くの人が積極的に文化と芸術に触れ、多様性を受容しつつ貴重な体験ができる環境づくりを経済団体（経済同友会他）も主体的に連携してサポートし、地域の活力創出につなげたい。（中略）優良な文化イベントの多くが開催されるこの機会を最大限活かし、学校においては、児童・学生に文化芸術に触れる教育機会を与えられるような積極的な取り組みを推奨したい。」（関西経済同友会 関西 2019･20･21 委員会提言「『世界に冠たる生涯スポーツ＆文化エリア＝KANSAI』を目指して」2016 年 5 月 10 日）

そもそも大阪・関西の経済人は、「フィランソロピー」という精神的伝統を持っている。大阪大学総合学術博物館・大学院文学研究科教授の橋爪節也氏（前出）は、このように述べている。

「『フィランソロピー』は、人類愛に基づき人々の Well-Being 改善を目的とした利他的活動や奉仕的活動等を指す。これは大阪の精神的伝統と近い。江戸時代、『浪華の八百八橋』と言われたが、大阪の 155 橋のうち幕府が架けた公儀橋は 12 橋、町人が生活や商売のために自腹で架けた町橋は 143 橋であった。淀屋橋、心斎橋などは町人の名前の付いた橋である。」（関西経済同友会 文化の力委員会講演会 2020 年 1 月 17 日）

上記の問題意識にもとづき、大阪・関西の企業が所有し、ふだんなかなか見ることが難しい美術品を広く一般市民に公開し、子どもたちに鑑賞教育を行う機会として活用すべく、民間主導の社会実験として、美術品展を開催した。「コーポレート・アート・コレクション『なにわの企業が集めた絵画の物語』展」（主催：関西経済同友会 企業所有美術品展実行委員会）と題して、2018 年度から 3 回にわたり開催し（※）、一定の成果を得ることができた。（成果の概要は第 2 章を参照のこと。）

（※）第 3 回は、2021 年 1 月 30 日から 2 月 13 日まで開催の予定だったが、新型コロナウイルス感染症拡大による緊急事態宣言の発出を受けて、開催を延期した。したがって、第 3 章の提言は、主に第 1 回・第 2 回の成果にもとづくものである。（対話型鑑賞のみ、第 3 回は感染症対策として、前 2 回より実施規模を縮小するとともに実施会場を展覧会会場ではなく各学校にて出前形式としたことにより無事実施できたため、その成果についても第 2 章には記載する。）

その成果をもとに、2021 年度開館予定の大阪中之島美術館に引き継がれるよう、大阪市および関係先に、第 3 章の通り提言する。

第２章　社会実験から得られたこと

社会実験としての「コーポレート・アート・コレクション『なにわの企業が集めた絵画の物語』展」から得られたことは、以下の３点である。（実施概要と成果の詳細は巻末の参考資料を参照のこと。）

① **「答のない問いに対して対話を通じて行う授業モデル」の社会実験として、子どもたちを対象とした「対話型鑑賞」を実施したところ、参加した小学生、教員の双方から、きわめて高い評価を得ることができた。**

京都芸術大学アート・コミュニケーション研究センターの協力により、展示作品を題材に、子どもたちを対象とした対話型鑑賞を実施した。参加者は、第１回 725 名、第２回 830 名、第３回 183 名である。（第３回のみ、新型コロナウイルス感染対策のため、前２回より実施規模を縮小するとともに、展覧会会場ではなく各学校にて出前形式で実施。）

参加した子どもたちの評価として、「今回の授業は面白かった」は第１回 94%、第２回 93%、第３回 93%、「また絵画などの作品がみたい」は第１回 89%、第２回 87%、第３回 92%、といずれも高い評価を得た。

教員の評価も、「とてもよかった＋よかった」計は第１回 89%、第２回 92%、第３回 100%となり、「自由に、答えの無い問いに対して話をする授業モデルが未発達なため、児童が想像力を活かして自由討論する今回の学習は、子どもはもちろん我々教師も大きく参考になりました」「思考に広がりが見られてとてもよかったです」などの声が寄せられた。

何よりも、参加した子どもたちの生き生きとした表情が、強く印象に残った。

② **来場者に対して、「対話型鑑賞」のナビゲーターを務めたいか、意向を検証したところ、美術館に関して能動的に関わりたい意欲を持つ市民が一定数存在することが確認できた。**

本美術品展の参考として視察した「東郷青児記念　損保ジャパン日本興亜美術館」（東京都新宿区）では、４つの組織（新宿区、教育委員会、学校、美術館とボランティアスタッフ）が連携して、小学生を対象とした美術鑑賞教育支援活動に 10 年間にわたり取り組んでいる。同美術館では、地域に根差した鑑賞教育の担い手として市民ボランティアを積極的に起用しており、中島隆太館長によれば、「ボランティアは、絵が好き、子どもが好きという人が集まっている。毎年春に欠員募集を出し、舞台に立つまで 1 年間準備を重ね、先輩ボランティアにつき練習した上でガイドをつとめる」とのことだった。

そこで、本美術品展の第２回会場にて、一般来場者に対して、対話型鑑賞教育のナビゲーターをやってみたいか、意向をアンケートで尋ねたところ、回答者全体の約３割が意向ありと回答した。中でも 20 代の意向が最も高かった。

将来、ナビゲーターを養成する研修を実施することになれば案内がほしいという申込者は、

123 名（来場者全体の 3.2%）に達した。

一方向的な鑑賞行為にとどまらず、鑑賞教育などの担い手として美術館に関して能動的に関わりたいという意欲を持った市民が一定数存在することが確認できた。

③ **イベント開催や周辺店舗との連携などを通じて夜間開館の社会実験を実施したところ、平日夜間の来場者を一定数実現できた。**

広く一般市民が日常的に文化体験を享受できるためには、平日夜間の鑑賞機会の確保も重要である。

こうした問題意識にもとづき、本美術品展は、開館時間を 10 時から 20 時までと設定し、夜間開館の来場促進のため様々なトライアルを実施した。（なお、第 3 回は新型コロナウイルス感染対策のため開館時間は 18 時までとした。）

各種イベントの実施（ギャラリーコンサート、キュレータートーク、一般向け対話型鑑賞プログラムの提供）や、地域の店舗との連携施策等を実施した結果、平日来場者のおよそ 1/4 は 17 時以降の来場となった（第 2 回）。

市民に開かれた新しい美術館のあり方として、また、海外と比して大阪・関西ではまだ十分ではないとされるナイトカルチャーの充実の一助としても、夜間開館などの取り組みを推進することは重要である。

第３章　提言

【対象】大阪市、地方独立行政法人 大阪市博物館機構、大阪中之島美術館

文化と芸術は人間にとって不可欠である。多くの人が積極的に文化と芸術に触れ、多様性を尊重しつつ貴重な体験ができる環境づくりに向け、我々経済界は、自らが地域文化の支援のため、具体的で広がりを持った行動に取り組む機運を今後も継続して高めていくとともに、大阪中之島美術館をはじめとした大阪市立美術館のあり方について、大阪市ほかの関係先に対して、以下の通り提言する。

提言

① **大阪市内の子どもたちを対象に、**
美術館におけるアートを活かしたアクティブ・ラーニングの機会の継続的な提供を。

未来の創り手としての子どもたちを対象に、大阪中之島美術館をはじめとした大阪市立美術館に対して、予測困難な時代を「生きる力」を、文化の力を活用して育てる教育活動を継続的に実施するよう望みたい。

大阪市内のすべての小学生が、在学中に少なくとも１回は本物の美術品に触れ、例えば対話型鑑賞教育のように、「答のない問い」に主体的に取り組む機会をつくってほしい。

美術館と学校との連携を進めるために必要な予算措置を、大阪市および関係先が持続的に講じるよう求めたい。

② **一方向的な鑑賞機会の提供にとどまらず、**
市民自身が美術館の担い手として能動的に参加できる機会の提供を。

美術館の活動が地域に根づき拡がることを目的として、大阪中之島美術館をはじめとした大阪市立美術館に対して、意欲の高い市民が美術館を支えるボランティアなどとして参加することや、市民自身がアクティブ・ラーニングに参加できる機会を広く提供することを望みたい。

鑑賞者への教育活動などの担い手として、美術館に関して能動的に関わりたいという市民意識に応えてほしい。

美術館自身が市民に対して積極的な広報活動に取り組むことで、美術館の取り組みについて広く社会の認知を高め、市民の能動的参加意欲を高めるよう求めたい。

③ **大阪・関西の都市価値を高めるため、夜間開館、イベント開催、周辺地域との連携など、**
市民に開かれた新しい美術館のあり方の実現を。

大阪・関西の文化の土壌を育むため、歴史と伝統が生み出した豊かな文化について、大阪中之島美術館をはじめとした大阪市立美術館に対して、広く一般市民が体験しやすい機会を拡大するよう望みたい。

たとえば、現役世代でも平日の夜間に気軽に美術館を楽しむことができる環境を整えたり、コンサートなど様々なイベントを開催することで美術館を訪れるきっかけを増やしたり、あるいは近隣の店舗や施設等との積極的な連携により美術館を核として地域の活力を増進したり、といった様々な活動に積極的に取り組む、市民に開かれた美術館づくりに取り組んでほしい。

創造力の源泉である文化の可能性を信じ、広く市民に文化の力が日常的に行き渡ることで、大阪・関西の都市価値を高め国際都市間競争に打ち勝つよう、継続的に努めてほしい。美術館を一つの核とした都市の文化力向上に向けて、大阪市および関係先が、意志ある企業・市民と行政との継続的なコミュニケーションの場づくりに取り組むことを求めたい。

■参考資料

① コーポレート・アート・コレクション「なにわの企業が集めた絵画の物語」展
（第１回～第３回）　実施概要と成果

【開催概要】

開催趣旨

① 大阪・関西の強みである分厚い文化基盤を活かすことで、発想力や感受性が豊かな次世代人材の育成に貢献する。企業所有の文化芸術作品を、広く一般に公開することで、大阪・関西の都市の価値を高める。
② 豊かな芸術・文化体験を通じて、大阪・関西の市民の文化リテラシーを高める。特に、次世代を担う子どもたちの感性を育む鑑賞プログラムを提供する。
③ 民間主導の社会実験として小規模にて開催し、その成果をもとに、2021 年開館予定の大阪中之島美術館に引き継がれるよう、今回開催の内容を踏まえ大阪市に対し提言を行う。

◎総合監修：橋爪節也氏（大阪大学総合学術博物館／大学院文学研究科　教授）
◎開催日程：
・ 第１回：2018 年 10 月 4 日（木）～18 日（木）10 時～20 時
　　※会期中無休（但し、最終日は 18 時まで）
・ 第２回：2020 年 1 月 24 日（金）～2 月 15 日（土）10 時～20 時
　　※月曜休館（但し、最終日は 18 時まで）
・ 第３回：新型コロナウイルス感染症拡大による緊急事態宣言発出のため、開催日程未定（調整中）
◎開催会場：
・ 第１回：堂島リバーフォーラム　４Ｆギャラリー
・ 第２回・第３回（予定）：大阪府立江之子島文化芸術創造センター

◎展示：大阪・関西企業が所有する身近な芸術作品
・ 第１回：24 点
・ 第２回：44 点
・ 第３回（予定）：45 点

◎入場料：大人５００円／中学生以下無料
◎主催：関西経済同友会 企業所有美術品展 実行委員会

◎協賛企業・個人：
・　第 1 回：企業 39 社、個人 9 名
・　第 2 回：企業 73 社、個人 10 名
・　第 3 回（予定）：企業 84 社、個人 8 名
◎後援：大阪市、大阪市教育委員会、大阪大学総合学術博物館（以上第 2 回・第 3 回）
朝日新聞社、産経新聞社、日本経済新聞社、毎日新聞社、読売新聞社、
NHK 大阪放送局、朝日放送グループ HD、MBS、関西テレビ、テレビ大阪、読売テレビ（以上第 1 回～第 3 回）
◎運営協力：
・第 1 回・第 2 回：（公財）関西・大阪 21 世紀協会
・第 3 回（予定）：（株）博報堂プロダクツ
◎協力：京都芸術大学、（公財）関西・大阪 21 世紀協会（第 3 回の対話型鑑賞プログラム）

【来場者数】
◎総来場者数：
・　第 1 回：4,636 名／第 2 回：4,661 名／第 3 回：（開催前につき未定）
◎有料入場者数：
・　第 1 回：2,841 名／第 2 回：2,288 名／第 3 回：（開催前につき未定）

【来場者の評価】
展覧会として高い評価を得ることができるとととともに、「見る」から「参加する」へ、美術品展に対して能動的にかかわりたい市民意識が明らかになった。
◎展覧会の評価「大変良かった＋良かった」計：
・　第 1 回：92%
・　第 2 回：95%
・　第 3 回：（開催前につき未定）
◎対話型鑑賞教育の印象「大変良かった＋良かった」計：
・　第 1 回：85%
・　第 2 回：88%
・　第 3 回：（開催前につき未定）
◎対話型鑑賞教育のナビゲーター意向（第 2 回）：
・　「対話型鑑賞教育」のナビゲーターをやってみたい人は、全体の 28%（「ぜひやってみたい」は、8.4%）。年代別では 10～50 代いずれも 30%を超えた。中でも 20 代の意向が最も高かった。
・　将来、研修実施にあたり案内がほしいとの申込者は、全体の 3.2%（123 名）に達した。（年代別では、母数（来場者数）が多い 50 代以上が中心。）

対話型鑑賞教育

子どもたち、教員双方から高い評価を得ることができた。「答えの無い問いに対して対話を通じて行う授業モデル」の体験機会を提供できた点が、教員から高く評価された。

◎子どもたちの総参加者数：

・ 第 1 回：小学校 8 校 22 クラス 725 名　※学校参加以外（一般公募）18 名含む
・ 第 2 回：小学校 10 校 25 クラス 830 名　※学校参加以外（ボーイスカウト）12 名含む
・ 第 3 回：小中学校 3 校 6 クラス 183 名　※前 2 回とは異なり各学校への出前形式で開催（十分な感染対策を講じて）

◎子どもたちの評価：

・ 美術館に行ったことがありますか　：第 1 回 52%　第 2 回 62%　第 3 回 86%
・ 今回の授業は面白かったですか　　：第 1 回 94%　第 2 回 93%　第 3 回 93%
・ また絵画などの作品が見たいですか：第 1 回 89%　第 2 回 87%　第 3 回 92%

◎教員の評価：

・ 対話型鑑賞教育プログラムの評価「とてもよかった＋よかった」計
　：第 1 回 89%　第 2 回 92%、第 3 回 100%
・ 普段の授業に生かせる発見があった：第 1 回 89%　第 2 回 100%、第 3 回 100%
・ 「対話型鑑賞教育プログラム」来年度以降も子供たちに受けてほしい
　：第 1 回 96%　第 2 回 100%、第 3 回 93%

＜教員の自由意見＞

・ 絵の鑑賞をしたことはあっても、思ったことを意見交流することは経験がない子どもたちだったので、新鮮な体験だったと思います
・ 普段、中々自分の思いを表現できない児童も、最後には自分なりに表現することができて、芸術の力ってすごいなと感じました
・ 自由に、答えのない問いに対して話をする授業モデルが未発達なため、児童が想像力を活かして自由討論する今回の学習は、子どもはもちろん我々教師も大きく参考になりました。子どもははじめ戸惑いつつも次第に自由に表現できる喜びを味わえていたと思います
・ 「対話しながら作品を鑑賞する」ということを今まで私自身経験がなかったので、ぜひ授業でも取り入れたいなと思いました。思考に広がりが見られてとてもよかったです
・ 対話の仕方などはとても勉強になりました。普段の様々な場面でも活かしていきたいです
・ 「考えること」「聴くこと」の大切さをさらに重視した授業づくり。意見や考えの交流が盛んに行われる授業づくり
・ 「なぜ」ではなく、「どこを見て」という発問がわかりやすかった
・ 子どもの視点を大切にした授業は、一人ひとりの子どもにとって魅力のある授業であるということをあらためて感じました
・ 私は担当が英語なのですが、普段の授業でも対話型授業を実践してみたいと勉強になりました
・ 定期的にでも継続して授業してほしい

【夜間開館来場者比率（17 時以降)】

各種イベントの実施（ギャラリーコンサート、キュレータートーク、一般向け対話型鑑賞プログラムの提供）によって、平日来場者のおよそ 1/4 は 17 時以降の来場となった。

◎第 1 回：22.2%（平日平均）　9.3%（休日平均）
◎第 2 回：26.3%（平日平均）　6.3%（休日平均）

【地域連携活動】

地域に根づき、地域と共生する新たな美術館のあり方を提案するために、地域の料飲店を対象とした「ファンづくり」にトライした。

◎第 1 回：本展覧会と会場近隣（福島）の人気グルメがお得に楽しめるチケットを期間限定で販売するグルメ企画「福島アートバル」を実施。本展覧会の入場券 2 枚とドリンク 2 杯サービスが付いた 2000 円分の金券を協力店で販売した。

・　協力店：全 16 店
・　総チケット販売数：79 枚（絵画展入場券 158 枚）
・　バル参加者の絵画展への入場者数：70 名（一般来場者 3,911 名の 1.8%）
　※1 店あたり 4.4 名

◎第 2 回：「本展覧会を自発的に応援してくれる」地域の飲食店を募った。ポスターの店内掲出をお願いし、協力店に本展覧会の無料招待券を進呈した。招待券にはお店の印を押して配布していただいた

・　協力店：全 24 店
・　協力店に配布した招待券での来場者数：106 名（一般来場者 3,830 名の 2.8%）
　※ 1 店あたり 4.4 名

＜協力店の声＞

・　レベルが高い。すばらしい絵画が展示されている。もっとみんなに観てもらいたい。
・　第 3 回の開催を期待。大阪の文化度を上げる良い企画なので継続してほしい。
・　お客様に喜んでいただけたので次回も協力したい。

【報道件数】

・　第 1 回：　※広告換算額：¥50,658,435
　➢　新聞：18 件
　➢　テレビ・ラジオ：10 件
　➢　ＷＥＢ：12 件　※転載元のみ
・　第 2 回：　※広告換算額：¥101,768,858（WEB の集計方法を変更したので第 1 回との比較はできない）
　➢　新聞：32 件
　➢　テレビ・ラジオ：11 件
　➢　ＷＥＢ：167 件　※転載先を含む総数（転載元のみでカウントすると 26 件）
・　第 3 回：(開催前につき未定)

② 有識者の意見（文化の力委員会、芸術・文化委員会　講演要旨）

【地域経済・教育とアート】兵庫県立美術館館長　蓑豊氏
芸術・文化委員会講演要旨（2017 年 8 月 8 日）抜粋

美術館は街の顔である。金沢 21 世紀美術館は、2015 年度の入館者数が 230 万人と全国一位で、200 億円近くの経済効果をもたらしている。来場者の 60%が家族連れで外国人も多い。

日本ではなかなか美術館で子どもの姿を見ないが、大英博物館など、海外では子どもたちが美術館に寝袋を持ち込んで泊まれるイベントもある。金沢 21 世紀美術館では、開館の際、子どもたちにぜひ本物のアートと接して感性を育んでもらいたいと考え、**市内の全小中学生約 4 万人を美術館に招待する**プロジェクトを実施した。以後 12 年間、小学 4 年生を継続的に招待している。2016 年には、**石川県が全国学力テストで初めて一位を獲得**した。いい音楽、いい絵、いい文章に触れることはとても大切で、芸術の答えは一つではない。受験勉強だけではない、**感性教育が子どもたちを奮い立たせた成果**だと考える。（略）

好奇心旺盛な 10 歳（小学 4 年生）の子ども、あるいは 30 代のサラリーマンがもっと美術館に来て感性を磨けば、日本の未来は変わる。**大阪でも、彼らに向けて感性教育や学びの場を企画してほしい**。ビジョンを描き、夢で終わらせることなく、やり遂げることが重要。ここ関西から日本が元気になっていくことを期待する。

【対話型鑑賞教育】京都造形芸術大学教授（当時）福のり子氏
文化の力委員会講演要旨（2018 年 8 月 8 日）抜粋

アートとは、そこに存在しない何かをそこにみる行為である。例えば絵画は、実際にはキャンバスと絵の具の盛り上がりだ。しかし、鑑賞者によってそこに意味や価値が付加される。アートとアート作品は異なる。作品は基本的にモノ、アートとはコト、作品と鑑賞者との間に起こるコミュニケーションなのである。

知識や情報よりも、鑑賞者同士のコミュニケーションを大切にして美術作品を鑑賞する対話型鑑賞。**「みる・考える・話す・聴く」という 4 つの能力を普段よりも意識的に使い、作品の表面ではなく、その奥にある意味を考える**。AI は、表面上の意味や正しい答えは早く的確に出すことはできる。しかし、物事の背後にある世界、奥深い意味を読み解くことはできない。対話型鑑賞で行うことは、**AI には備わっていない、人間にしかできない行為**なのである。

対話型鑑賞によって培われるのは、①知的探究心 ②目的意識をもった観察力 ③正解のない問いに取り組む力 ④創造的解釈 ⑤体系的･論理的思考 ⑥ 言語能力 ⑦ 他者を理解したいという気持ちの芽生え→コミュニケーションの基礎 ⑧多様性の受容→他者と生きていくための基礎 ⑨自己対話力など様々である。これらは**「自分で課題をみつけ、自ら考え、主体的に判断・行動し、問題を解決する力、自らを律しつつ他人と協働する力」**という、学習指導要領で掲げられている「生きる力」にほかならない。アート(art)の語源はアルス(ars)、つまり「生きる術」である。対話型鑑賞で得られるのは、今後どのような世界がやってきても、その中で生き抜いていくことができる、サバイバル力なのだ。

【対話型鑑賞教育】東郷青児記念損保ジャパン日本興亜美術館　専務理事・館長　中島隆太氏
視察および取材要旨（2018 年 12 月 17 日）

新宿区立の小中学校を対象に美術鑑賞プログラムを閉館日に実施しており、今年で 10 年目。**鑑賞プログラムのガイドは全員ボランティア**で、在籍者数は 60～70 人。鑑賞会の実施にあたっては、事前に予定をメールで確認。1 回あたり 20～30 名の参加が必要。3 分の 1 が都合つかなければ、鑑賞会は成り立たない。

鑑賞会では、子どもたちは 5～6 名のグループに分かれ、ガイドが 1 名ついて対話しながら鑑賞する。注意事項を説明する職員 1 名、鑑賞を担当するガイド約 10 名のほか、各グループを離れたところで見て誘導する人、お水を渡す人、トイレの案内をする人、ワークシートを渡す人がおり、すべて役割分担している。

ボランティアは、絵が好き、子どもが好きという人が集まっている。毎年春に欠員募集を出し、舞台に立つまで 1 年間準備を重ね、先輩ボランティアにつき練習した上でガイドをつとめる。男性が 1 割、女性は主婦や 50～60 代の子育てを終えた人が多い。

ガイドに知識は必要としていないが、ボランティアで来てもらうことへのインセンティブとして、学芸員によるギャラリー研修を実施している。

子どもたちは、「よ～く」「見て」「感じて」「考えて」「話して」「聴く」という鑑賞ポイントについて説明を受けた後、各グループで絵を鑑賞する。鑑賞する絵は子どもたちが選び、飽きたら次の絵に移動する。指さすのではなく、言葉で伝えあうのがポイント。

鑑賞教育は、4 つの組織（新宿区、教育委員会、学校、美術館とボランティアスタッフ）が協力して行っている。新宿区からの助成金は年間 200 万円で、使途はガイドスタッフの資料・教材と水。送迎バスは、（公財）新宿未来創造財団が区の税金で運営しており、美術館の責任外となっている。公道における子どもたちのバス乗降時は最も気を使っており、ボランティアガイドの他、必ず職員が立ち会っている。車いす、特殊学校の受け入れ実績もあり。

【関西企業のフィランソロピー精神】大阪大学総合学術博物館/大学院文学研究科教授
橋爪節也氏 文化の力委員会講演要旨（2020 年 1 月 17 日）抜粋

■大阪の歴史と精神

「フィランソロピー」は、**人類愛に基づき人々の Well-Being 改善を目的とした利他的活動や奉仕的活動等**を指す。これは**大阪の精神的伝統**と近い。江戸時代、「浪華の八百八橋」と言われたが、大阪の 155 橋のうち幕府が架けた公儀橋は 12 橋、町人が生活や商売のために自腹で架けた町橋は 143 橋であった。淀屋橋、心斎橋などは町人の名前の付いた橋である。

■「大大阪」の都市経営 ～シンボルの創生～

「大大阪」の名が今も語られるのは、第七代大阪市長 關一氏のもと大阪の都市経営が成功したからだ。ただ、言葉に踊らされず検証することは重要で、「我等の前途は遥かである。途は遠い」という当時の記述もある。市民が団結し自らの町を良くするシンボルとして、大阪城天守閣の再建を市長が提唱し、昭和 6 年に市民の寄付金で竣工。同年、大阪帝国大学も開設さ

れた。

大阪市は大正 12 年頃、文化政策三部作ともいえる美術振興プロジェクトとして美術館の建設・美術学校の開校・美術家団体の結成を進めていた。美術館開館は諸事情で昭和 11 年にまで遅れたが、当初の計画通り大正 13 年に大阪市立美術館が開館していたら、東京、京都よりも早い日本最初の公立美術館として、大阪の都市イメージも文化の見方も今日とは大きく違っていたであろう。(略)

【歴史に学ぶ－「大大阪」と美術】大阪大学総合学術博物館/大学院文学研究科教授

橋爪節也氏文化の力委員会講演要旨（2020 年 9 月 29 日）抜粋

コーポレート・アート・コレクション『なにわの企業が集めた絵画の物語』展の目的は、文化的リテラシーの向上による大阪の発展である。そのためには過去の歴史の理解と現状の認識が不可欠だ。企業家のフィランソロピーを、子どもたちの教育、新しい大阪中之島美術館につなげようとする取り組みである。大阪中之島美術館の建設の糸口は、1983 年、山本發次郎氏コレクションの寄贈であった。当時、佐伯祐三氏の油彩画をはじめ、墨蹟、東南アジアの染織など合計 580 点に及ぶコレクションが大阪市に寄贈された。

第 3 回となる本展の特集テーマは「大大阪」。明治元年（1868）明治政府が大阪府を設置。明治 22 年（1889）に大阪府下 4 区を大阪市とし市制施行。大正 14 年（1925)、大阪市は第 2 次市域拡張で、面積人口とも東京市を抜き、ニューヨーク、ロンドン、パリ、ベルリン、シカゴに次ぐ世界第 6 位の大都市となった。大大阪の名が今も語られるのは關一市長を中心とした大阪の都市経営が成功したためで、御堂筋や日本初の公営地下鉄の建設、築港整備など、今日につながる都市基盤が築かれた。本展では、大大阪時代の中之島を描いた絵画を展示する。大阪市役所とその対岸にあった商工会議所、日本銀行大阪支店、証券取引所、中之島公会堂、大阪中央郵便局、朝日会館、新聞の紙を運ぶ船など、当時のシビックセンターとしての中之島の様子がしのばれる。また、街中にあるアート作品や名建築についても紹介する。

大阪は、京都、江戸（東京）と並ぶ「三都」で、独自の個性あるここしかない都市だ。私は「素数」のような都市であると感じる。経済的蓄積以外にも、大阪にしかない歴史的蓄積と文化資源がある。我々自身がそれを学び発信していくことが不可欠である。

③ 関西経済同友会の活動経緯

【関西 2019・20・21 委員会提言（2016 年 5 月 10 日）抜粋】

基本認識

（略）これまでに残された偉大な文化・芸術を継承し、さらに新しいものや人を生み出していこうとする意思と、自主自律の行動力が今まさに問われている。国や自治体からの資金を受身で待つだけではなく、2019･20･21 年のメガイベントを契機に、できる限り**多くの人が積極的に文化と芸術に触れ、多様性を受容しつつ貴重な体験ができる環境づくり**を経済団体（経済同友会他）も主体的に連携してサポートし、地域の活力創出につなげたい。文化の中心は関西であり、東京よりもその潜在能力が高いと評されており、また、**文化・芸術に触れることで、発想やイノベーションを起こすセンスや人間力などの素地が創り上げられる**といわれている。関西が「文化首都」として活性化し、発展することは夢ではない。（略）

提言

（2）文化：

②ひとづくり【提言先：関西広域連合、自治体、関係機関】：

未来遺産継承という観点から、未来への人材育成に加え、雇用や産業の創造を目論む取り組みが必要である。

関西に居る我々自身が「自分たちの文化を楽しみ、理解し、誇ること」を起点に、「将来、関西から多くの文化人財を輩出すること」をめざしたい。**文化活動への参加促進や教育の取り組みを、子供、若年層に加え、生活者一般にも拡大し、文化リテラシーの高い生活者をより多くつくりだす**ことが目標達成に向けての重要な視点となると考える。（略）

③企業の積極参加【提言先：企業】：

大阪・京都・神戸の経済同友会をはじめとする**有志企業の所蔵する文化芸術作品や物的資産を活用したイベント**を自社ショールーム等を利用し開催することを検討する。このイベントを活用し、**関西生活者（大人から子供まで）の文化リテラシーを高める**きっかけとなることを狙いたい。開催にあたっては様々な障害があると思われるが、関西の企業が自ら動き、文化活性化に寄与することの意義は大きいと考える。（略）

④その他の提言【学校・家庭への提言】：

優良な文化イベントの多くが開催されるこの機会を最大限活かし、学校においては、**児童・学生に文化芸術に触れる教育機会を与えられるような積極的な取り組み**を推奨したい。また、家庭においても、大人が自らの文化リテラシーを涵養し、子供・家族を交えた文化活動に参画できる環境づくりが必要である。

【第 56 回関西財界セミナー宣言（2018 年 2 月 9 日）抜粋】

われわれは、第 56 回関西財界セミナーにおいて、「いざ、舞台を関西へ ～関西からはじまる未来社会のデザイン～」をテーマに議論を行った。これを踏まえ、以下の通り宣言する。（略）

2. われわれは、創造力の源泉である文化の可能性を信じ、関西の歴史と伝統により生まれた**文化の力を活用することによって、より豊かな感性と発想力に富む人材の育成に取り組む**。また、世界中から多彩な人々を惹きつけるために、関西全体で連携を図り、その姿を情報発信する。これにより、知の交流を促し、イノベーションを起こし、新しい産業を生み出していく。そして、文化庁の京都移転の好機も活かし、関西の多様で魅力溢れる文化資源を産官学一体となって磨き上げ、国際的都市間競争を勝ち抜いていく。（略）

以上

2018～2020 年度 文化の力委員会 活動実績

（役職は実施当時のもの）

2018 年度

６月１９日　会合「2018 年度の活動方針（案）について」

７月３１日　視察・鑑賞会
「文楽特別公演『新版歌祭文』『日本振袖始』」
講師：人形遣い　桐竹勘十郎氏

８月　８日　講演会・会合
「対話型鑑賞によって得られる AI 時代を生き抜くための能力」
講師：京都造形芸術大学芸術学部 教授　福のり子氏

９月１８日　講演会・会合
「芸術の力」
講師：建築家　安藤忠雄氏

１０月４日～１８日
第１回コーポレート・アート・コレクション「なにわの企業が集めた絵画の物語」展

１０月１５日　視察・鑑賞会
「大阪松竹座『十月大歌舞伎』」
講師：演劇評論家・「関西・歌舞伎を愛する会」代表世話人
河内厚郎氏

１１月１５日　視察・鑑賞会「ザ・シンフォニーホール視察」
講演①「日本センチュリー交響楽団」
講師：日本センチュリー交響楽団 主席指揮者　飯森範親氏
講演②「ザ・シンフォニーホールとクラシック音楽芸術の歴史と意義」
講師：ザ・シンフォニーホール 総監 浮舟邦彦氏
同ホール 音楽総監督兼ゼネラルマネージャー 喜多弘悦氏

2019 年

１月２１日　講演会・会合
「琳派の美学とグローバリズム」
講師：筑波大学 名誉教授　三井秀樹氏

２月２１日　講演会・会合
「アート×ビジネスの未来」
講師：（株）スマイルズ 代表取締役社長　遠山正道氏

2019 年度

６月　６日　会合「2019 年度の活動方針（案）について」

７月２５日　講演会・会合
「大阪・大阪の文化をつくり上げた先人達」
講師：歴史家・作家　加来耕三氏

８月　２日　視察・鑑賞会
「国立文楽劇場開場 35 周年記念
文楽特別公演『仮名手本忠臣蔵（五段目から七段目まで)』」
講師：太夫 竹本織太夫氏・三味線 鶴澤清志郎氏

１０月１６日　視察・鑑賞会「ザ・シンフォニーホール視察」
講演①「ザ・シンフォニーホールとクラシック音楽芸術の歴史と意義」
講師：ザ・シンフォニーホール 総監 浮舟邦彦氏
同ホール 音楽総監督兼ゼネラルマネージャー 喜多弘悦氏
講演②「関西フィルハーモニー管弦楽団の取り組みと関西音楽界について」
講師：関西フィルハーモニー管弦楽団　首席指揮者　藤岡幸夫氏

１０月２８日　講演会・会合
「時代の節目、文化の力 ―大阪・関西が取り組むべき課題とは―」
講師：劇作家・演出家・城崎国際アートセンター芸術監督　平田オリザ氏

１２月１６日　講演会・会合
「ビジネス教養としての名画鑑賞術」
講師：多摩美術大学 美術学部教授　西岡文彦氏

2020 年

１月１７日　講演会・会合
「コーポレート・アート・コレクション第 2 回『なにわの企業が
集めた絵画の物語』展の意義と見どころについて」
講師：大阪大学　総合学術博物館/大学院文学研究科教授　橋爪節也氏

１月２４日～２月１５日
第２回コーポレート・アート・コレクション「なにわの企業が集めた絵画の物語」展

４月１６日　文化の力委員会 委員長・公益財団法人 関西･大阪 21 世紀協会 理事長
緊急アピール
「新型コロナウイルス感染症拡大の影響下、文化活動の灯を絶やさない迅速な施策を」
を発表

2020 年度

６月　９日　会合「2020 年度の活動方針（案）について」

８月１７日　講演会・会合
「科学技術と感性の融合 ～文化力アップにつなぐ～」
講師：ナレッジキャピタル代表理事・アジア太平洋研究所所長
宮原秀夫氏

９月　３日　講演会・会合
「劇団四季の現状と課題 ～文化の力とビジネス創造～」
講師：劇団四季　代表取締役社長　吉田智誉樹氏

９月２９日　講演会・会合
「歴史に学ぶ－『大大阪』と美術」
講師：大阪大学 総合学術博物館/大学院文学研究科 教授
橋爪節也氏

１０月２３日　視察・鑑賞会「ザ・シンフォニーホール視察」
講演①「日本センチュリー交響楽団について」
講師：日本センチュリー交響楽団　首席指揮者　飯森範親氏
講演②「クラシック音楽界における新型コロナウイルスの影響」
「With コロナ時代に向けた The Symphony Hall の取り組み」
講師：ザ・シンフォニーホール 総監　浮舟邦彦氏
同ホール 音楽総監督兼ゼネラルマネージャー　喜多弘悦氏

１１月　５日　講演会・会合
「現代美術の魅力、美術館が社会に果たす役割とは」
講師：ニューヨーク市立大学キングスバロー校 助教授　山村みどり氏

１１月１３日　視察・鑑賞会
「錦秋文楽視察『本朝廿四孝』」
講師：人形遣い　桐竹勘十郎氏

１２月１４日　会合「提言骨子案について」

１２月２１日　常任幹事会にて提言骨子案を審議

2021年

１月１３日　講演会・会合
「デザイン経営の最前線
～ビジネス×テクノロジー×デザインによる価値創出～」
講師：Takram代表・デザインエンジニア
英国ロイヤル・カレッジ・オブ・アート名誉フェロー
田川欣哉氏

（１月３０日～２月１３日
第３回コーポレート・アート・コレクション「なにわの企業が集めた絵画の物語」展
⇒新型コロナウイルス感染症拡大による緊急事態宣言の発出のため延期）
※対話型鑑賞のみ別会場（学校への出前形式）にて実施。

２月１７日　会合「提言案について」

２月２２日　幹事会にて提言案を審議

３月　２日　提言「アートを活かした人材育成と都市価値向上へ。
～大阪・関西の未来を文化の力でつくる～」
を記者発表

３月末
書籍「なにわの企業が集めた絵画の物語
～コーポレート・アート・コレクション見聞録～」を発行予定

第３回コーポレート・アート・コレクション「なにわの企業が集めた絵画の物語」展
を開催予定

2020 年度　文化の力委員会　名簿

（敬称略、2021 年 2 月 22 日現在）

区分	氏名	会社名	役職
委員長	浮舟 邦彦	学校法人 滋慶学園	理事長
委員長 （美術展企画担当）	坂上 和典	(株)博報堂	特任顧問
副委員長	新居 勇子	全日本空輸(株)	上席執行役員関西支社長
〃	上島 健二	(株)ｉＴｅｓｔ	代表取締役社長
〃	大志万 公博	三精テクノロジーズ(株)	代表取締役副社長
〃	大富 國正	(株)エキスプレス	代表取締役会長
〃	沖津 嘉昭	岩井コスモ証券(株)	代表取締役会長　CEO
〃	片山 勉	紀伊産業(株)	取締役会長
〃	金井 隆夫	大成建設(株)	副社長 執行役員 西日本営業本部長
〃	鴻池 一季	(株)鴻池組	名誉会長
〃	酒井 朋久	サントリーホールディングス(株)	相談役
〃	﨑元 利樹	(公財)関西・大阪 21 世紀協会	理事長
〃	佐野 吉彦	(株)安井建築設計事務所	代表取締役社長
〃	塩田 達夫	三井物産(株)	関西支社副支社長
〃	志賀 茂	がんこフードサービス(株)	代表取締役副会長
〃	辰馬 政夫	(株)電通	執行役員 関西支社長
〃	中北 健一	(株)中北製作所	代表取締役会長
〃	新倉 雄二	(株)博報堂ＤＹメディアパートナーズ	顧問
〃	野村 卓也	(株)スーパーステーション	代表取締役社長
〃	藤川 博章	(株)博報堂	関西支社長
〃	藤田 幸一	ストーリーテラー(株)	代表取締役会長
〃	藤本 加代子	社会福祉法人隆生福祉会	理事長
〃	山本 雅弘	(株)毎日放送	最高顧問
〃	吉野 国夫	(株)ダン計画研究所	会長
〃	領木 誠一	医療法人誠仁会りょうき歯科ｸﾘﾆｯｸ	理事長
委員	石田 智也	(株)アイアンドエス･ビービーディオー	執行役員
〃	岩波 清久	日本ピラー工業(株)	代表取締役会長
〃	植 栄昭	(株)サンヨーホーム	関西支店長
〃	植田 孟徳	(株)三井住友銀行	経営企画部 上席部長代理
〃	上山 久史	大日本除虫菊(株)	専務取締役
〃	小倉 由紀	(公財)関西・大阪 21 世紀協会	常務理事
〃	片桐 陽	大阪商工信用金庫	会長
〃	川上 真一	住電商事(株)	代表取締役社長
〃	北村 和彦	日本ﾀｸﾀ・ｺﾝｻﾙﾀﾝｼｰ・ｻｰﾋﾞｽｽﾞ(株)	常務
〃	北村 政美	ロングライフホールディング(株)	代表取締役会長
〃	國部 保	パナソニック ホームズ（株）	執行役員
〃	久保 行央	トヨタカローラ新大阪(株)	代表取締役社長
〃	下辻 則仁	コクヨマーケティング(株)	関西支社長
〃	城阪 勝喜	松栄(株)	取締役会長
〃	鈴木 大輔	(株)アートローグ	代表取締役 CEO
〃	隅田 和男	(株)浪速ポンプ製作所	取締役会長
〃	関根 康	松竹(株)	取締役 西日本統括担当
〃	武智 順子	弁護士法人御堂筋法律事務所	パートナー・弁護士
〃	田所 伸浩	(株)魚国総本社	代表取締役社長
〃	土清水 縁	(有)Brillante	代表取締役社長
〃	中西 竜雄	中西金属工業(株)	代表取締役社長
〃	西尾 智子	(有)ダンスウエスト	代表取締役

委員	細見 基志	ダイキン工業(株)	役員待遇 コーポレートコミュニケーション室長
〃	前川 秀和	西日本高速道路(株)	代表取締役社長
〃	三村 景一	(株)毎日放送	代表取締役社長
〃	村川 洋一	(株)竹中工務店	常務執行役員
〃	森田 亮	損害保険ジャパン(株)	専務執行役員 関西第一本部長
〃	薮内 知利	ぴあ(株)	主席執行役員 関西支社長
〃	山平 恵子	上新電機(株)	取締役（社外）
〃	山本 章弘	(公財)山本能楽堂	代表理事
委員長スタッフ	喜多 弘悦	学校法人 滋慶学園	取締役ゼネラルマネージャー
〃	亥角 稔久	(株)博報堂	ビジネス開発部部長
〃	荻洲 貞明	(株)博報堂	シニアストラテジックプランニングディレクター
〃	田口 晃	(株)博報堂	関西支社　渉外スタッフ
スタッフ	荒井 祥男	(株)博報堂ＤＹメディアパートナーズ	プロデュースチーム エグゼクティブメディアプロデューサー
〃	以西 美景	(株)電通	ソリューションデザイン局 ビジネスデザインプロデューサー
〃	上野 彰紀	損害保険ジャパン(株)	大阪北支店長
〃	大島 賛都	(公財)関西・大阪 21 世紀協会	アーツサポート関西事業部チーフプロデューサー
〃	大富 將司	(株)エキスプレス	取締役 企画開発担当
〃	小川 純一	松竹(株)	映像本部関西支社マネージャー
〃	小澤 修	サントリーホールディングス(株)	大阪秘書室専任課長
〃	上条 恵司	日本ﾀｸｼｰ・ｺﾝｻﾙﾀﾝｼｰ・ｻｰﾋﾞｽﾞ(株)	クライアントパートナー
〃	北 伸也	大日本除虫菊(株)	取締役宣伝部長
〃	北上 大	(株)エキスプレス	取締役 大阪事業本部長 兼 名古屋事業本部担当
〃	北桝 武次	サントリーホールディングス(株)	大阪秘書室専任部長
〃	絹川 進	(株)安井建築設計事務所	企画部企画主幹
〃	木村 明則	(公財)関西・大阪 21 世紀協会	万博記念基金事業部長兼アーツサポート関西事業部長
〃	葛原 淳	(株)毎日放送	役員室
〃	桑田 俊治	パナソニック ホームズ（株）	渉外部　部長
〃	髙橋 祐二	(株)博報堂ＤＹメディアパートナーズ	ビジネスディベロップメントディレクター
〃	武安 俊哉	テレビ大阪(株)	秘書 広報 部長
〃	田崎 友紀子	(株)スーパーステーション	取締役副社長
〃	田村 典正	大成建設(株)	関西支店　統括営業部長
〃	徳満 健太郎	日本ﾀｸｼｰ・ｺﾝｻﾙﾀﾝｼｰ・ｻｰﾋﾞｽﾞ(株)	クライアントパートナー
〃	長山 治朗	トヨタカローラ新大阪(株)	リース担当部長
〃	根本 裕之	全日本空輸(株)	関西支社 副支社長
〃	野口 幸男	三精テクノロジーズ(株)	取締役執行役員 舞台機構事業本部長
〃	長谷川 壮	(株)毎日放送	役員室エグゼクティブ
〃	松本 務	(株)毎日放送	役員室調査管理部シニアスタッフ
〃	宮尾 展子	(株)ダン計画研究所	代表取締役
〃	森岡 慎司	(株)電通	関西支社 ソリューション・デザイン局 シニア・ビジネスデザイン・プロデューサー
〃	山田 正和	日本ピラー工業(株)	総務人事部次長
〃	山本 佳誌枝	(公財)山本能楽堂	事務局長
〃	弥吉 啓介	トヨタカローラ新大阪(株)	常務取締役
代表幹事スタッフ	加藤 行教	伊藤忠商事(株)	調査・情報部関西開発調査室長
〃	光信 博雄	伊藤忠商事(株)	調査・情報部関西開発調査室 社長特命（関西担当）付
〃	高澤 求尚	日本生命保険(相)	本店企画広報部部長
〃	坂井 明	日本生命保険(相)	本店企画広報部課長
〃	川手 由佳	日本生命保険(相)	本店企画広報部副主任
事務局	廣瀬 茂夫	(一社)関西経済同友会	常任幹事 事務局長
〃	吉竹 良陽	(一社)関西経済同友会	顧問（事務局長補佐）
〃	與口 修	(一社)関西経済同友会	企画調査部長
〃	木津 光明	(一社)関西経済同友会	企画調査部課長
〃	東野 訓子	(一社)関西経済同友会	企画調査部主任